ネオ・サイバネティクス研究会／基礎情報学研究会合同研究会報告書

2023 年 3 月 31 日
情報システム学会基礎情報学研究会

1　日時：2023 年 2 月 25 日（土）13：00～14：45
2　場所：ZOOM によるオンライン
3　参加者：46 名
4　テーマ：「岩波新書『超デジタル世界：DX、メタバースのゆくえ』をめぐって」
5　講師：西垣通（東京大学名誉教授）
6　研究会要旨

本研究会は、今年 1 月に出版された岩波新書『超デジタル世界：DX、メタバースのゆくえ』をベースに、著者の西垣通先生に日本のデジタル化の現状分析とその問題点などについてお話いただいた。

西垣先生のお話は以下のような内容だった。

・日本では、DX やメタバースなどのデジタル化が遅れているが、その原因としては、どんな社会をめざすのかという理念がはっきりしないことや、DX とはいったい何なのか。みんながしっかり把握しているとは思えないことが考えられる。
・DX やメタバースはインターネットをベースとしたものなので、オープンなシステムである。それに対して日本の伝統的な IT は、クローズドなシステムである。クローズドなシステムは、オープンなシステムに比べて信頼性も高く安全である。
・いま AI 社会の未来は明るいと言っている人達が多いが、これは超人間主義であり、このような考え方は西洋文明の中核にあるユダヤ・キリスト一神教からきている。それを考えないで、上っ面だけで DX とかメタバースとか言っている人が多いが、これは間違いである。
・かつてマクロソフトの Chatbot が問題を起こした。いま ChatGPT が話題になっているが、ChatGPT のような AI は意味を理解していなくてしゃべっている。そういう AI に判断をまかせていいのか。それをみなさんに問いかけたい。
・日本の文化は、内向きで論争を嫌い、空気を読んでおだやかに暮らすというもの。それに対して、アメリカは、自立した個人による自己責任のオープンな競争原理の文化である。このアメリカ型の競争原理を日本に持ち込んでいいのか。これによって犠牲者が出てきて「自己責任のネット荒野」が広がるのではないか。
・情報科学者は機械情報にしか興味を示さないが、これは問題である。情報科学には、コンピューティング・パラダイムとサイバネティクス・パラダイムがある。このサイバネティクス・パラダイムのほうをもっとやらなくてはならなかったが、コンピューティング・パラダイムのほうばかりをやってきた。
・生物と機械が同じだと思っている IT 技術者や脳科学者が多いが、生物と機械はシステムの成り立ちが違う。生物はオートポイエティックシステムで、自分で自分の行動ルールを作り、現在時点で環境と相互作用をする。それに対して機械はアロポイエティックシステムで、他者（人間）が作動ルールを作り、過去のデータに基づいて最適に作動する。AI は自律的に見えるが疑似自律的である。
・フランスの学者、オギュスタン・ベルクが『俳句における言葉の露点と景色』という本の中で主語がない俳句を取り上げ、自分をなくすことによって、世界をより生き生きと正しくつかめる文化が日本にはあるのだと述べている。さらに『風土の日本』の中で、日本人にとっての人工物とは自然と対立するものではなく、自然を再認識する方法であり、自然と人工の明確な境界は存在しないとも述べている。
・このような日本の文化状況を考えてデジタル化を進めるべきである。保険証とマイナンバーカードに一体化などという安易なことを考えているようではだめ。ネット社会のもたらす危険性に配慮してもっと安全なネットを構築すべきである。
・そのためには、情報教育を考えないといけないが、そうなっていない。高校の情報科に携わっている人達にとっては、「情報」というと機械情報しかない。もう一度情報というものを考え直し、西洋文化のもつ超人間主義のようなものを批判的にとらえて、日本はどのような情報政策をすべきかを考えるべきである。

＊西垣先生は、オギュスタン・ベルクの『俳句における言葉の露点と景色』の話をしたときに、この本を紹介してくれ、当日参加していた三村和子さんについてふれられ、感謝の意を述べられた。ま

た、三村さんの恩師であり、今年 1 月に亡くなられた情報システム学会のコアメンバーであった芳賀正憲さんについても、感謝の意を述べるとともに「ご冥福を祈ります」と述べられた。

西垣先生のお話の後、質疑応答に入り、司会者から三村和子さんにコメントが求められた。三村さんのコメントの後は、多くの方から質問や意見が出され、非常に盛り上がった研究会になった。

今回の西垣先生のお話は、いつにも増して力が入っていて、先生の熱意がひしひしと伝わってきた。お話の中で「自己責任のネット荒野」という言葉が心に刺さった。基礎情報学研究会ができて 10 年になるが、なかなか前に進めない状態にある。今回の西垣先生のお話を伺って、再度初心に返って、日本の文化状況を考えたデジタル化を進めるための情報教育について、考えてみようと思った次第である。

（文責　基礎情報学研究会事務局　高田信夫）